

## アラビスト外交官の39年

### 第 28 回 野営地でのカダフィ会談

2013 年 09 月 17 日

塩尻 宏

(中東調査会参与、元駐リビア日本国特命全権大使)

#### 《カダフィはいつも所在不明？》

リビアが 2003 年から国際社会に復帰し、欧米諸国がカダフィ政権に急接近し始めた状況を踏まえて、日本も当時外務副大臣だった逢沢一郎氏(自民党衆議院議員)を総理特使としてリビアに派遣しました。逢沢特使は 2004 年 6 月 8 日にトリポリに到着し、翌 9 日にカダフィ指導者と会談して小泉総理(当時)からの親書を手渡し、10 日午前にシュクリー・ガーネム全国人民委員書記(首相)と会談して、昼過ぎに出発という強行日程でした。私は駐リビア大使として逢沢特使のリビア滞在中の全ての行事に同行しました。

前号で書きましたとおり、この時期のリビアは各国の首相や大統領が引きも切らずに訪問していました。逢沢一郎氏は外務副大臣でしたが、小泉総理(当時)からカダフィ指導者あて親書を持参する総理特使として来訪してもらいましたが、最高実力者のカダフィが会うのは基本的に同等レベルの大統領又は首相のみで、その他に個人的に関心のある要人と会見することがあるというのが実情でした。しかも、会談が実現する場合にもその日時は直前まで知らされないのが通例でした。

逢沢特使がリビアに到着する当日、出迎えのためにトリポリ国際空港の貴賓室で待機していた私に対して、リビア側の出迎え者である対外連絡・国際協力担当全国人民委員会(外務省)アジア局長から「カダフィ指導者は昨日から急遽地方に出かけてトリポリ不在となったので、総理親書は逢沢特使が外務大臣と会談される際に手交願いたい」旨の申し入れがありました。空港から最初の行事である全国人民会議のスライマン・シャフーミ(Mr. Sulaiman Shahoumi)外務担当書記(外交委員長に相当)との会談に向かう車中で、私から逢沢特使にその旨を伝え、後ほど善後策を検討することになりました。

シャフーミ書記とは何度も面談し、普段から親しくしていた私は、逢沢特使との会談後、見送りの際の立ち話で、上記の外務省からの申し入れの趣旨を彼に伝え、「日本の折角の好意的関心に対してリビア側の適切な対応をお願いしたい」旨要請しました。彼はやや驚いた様子で「自分はこれから海外出張のため空港に行くこととなっているが、出発前に指導者に連絡してみる」との応答がありました。

その夜、日程の打合せを兼ねて行われた公邸での夕食会では、カダフィ指導者との会談がない場合の総理親書の扱いも議論されました。私からはシャフーミ書記に対して上記のように非公式な要請を行ったことを報告し、「総理親書をカダフィ指導者に直接手渡すのが総理特使の任務であるので、カダフィ指導者に会えないのであれば、親書は一旦持ち帰ることとするのも一案である」との意見を述べました。逢沢特使からは「カダフィ指導者に会えないこととなった場合には、日本とリビアとの関係にとって残念なことであるが、親書を持ち帰った場合には小泉総理への説明ぶりを考える必要があろう」との応答がありました。その日は結論が出ないまま、リビア側の出方を見ることとなりました。

### 《砂漠地帯の野営地で》

逢沢特使一行との夕食会が終わり、私が 2 階の寝室でシャワーを浴びて寝ようとしていた深夜になって、公邸に寝泊まりしていた現地職員から「リビア儀典庁の担当官と称する人物が大使にお会いしたいと言って公邸の入口に来ている」と知らされました。会ってみると「明朝 8 時半に、外務大臣が逢沢特使の泊まっているホテルに出迎えに行くので、一緒に出発できるように準備願いたい」との伝言でした。どこへ行くのかと尋ねても、彼は「自分はこのことを伝えるようにとされているだけである」と応答するだけでした。半ば要領を得ないままでしたが、取り敢えず逢沢特使一行に電話で連絡し、外務大臣の来訪に備えることとなりました。

翌日(2004 年 6 月 9 日)の朝、半信半疑ながらホテルで待機していると、シャルガム(Mr. Abderrahman Shalgam)外相が予告どおり 8 時半に到着し、逢沢特使に対して「これからカダフィ指導者との会談場所にご案内する」と言って早々に出発を促しました。取り敢えず、逢沢特使と私はシャルガム外相の車に同乗し、在エジプト日本大使館から通訳として応援出張してきた若手アラビストと在リビア日本大使館の担当官は私の大使車に乗って出発しました。ホテルで待機している同僚たちに行き先を知らせる必要もあったので、車中での会話の中で、私からシャルガム外相にカダフィ指導者との会談場所について尋ねたところ、彼は「行けば分かる」との感じで言葉を濁していました。

私たちは、最終目的地がどこか分からないまま、トリポリから東に向かって地中海沿岸沿いの幹線道路を 1 時間半ほど走り、古代ローマ遺跡レプティス・マグナ(Leptis Magna)近くのホムス(Al-Khoms:トリポリから 120 キロ)に到着しました。そこで小休止していた間に、シャルガム外相は何度か携帯電話で連絡していました。その様子から、彼自身も具体的な行き先を知らなかったようでした。私も携帯電話でトリポリの同僚に現在地を報告しました。ホムスを出発してしばらく走ると、幹線道路から南に分かれて内陸に向かいました。人影も全くない砂漠地帯に延びた舗装状態も余り良くない道路を 1 時間余りひたすら走って、軍用車両が円形に囲んだ野営地のようなところに到着しました。



入口で全員の携帯電話を預けるように言われ、数十メートル歩いてユーカリと思われる大きな木の陰で待ち受けるカダフィ指導者のところに案内されました。彼の傍には数冊の書物が置かれた粗末なスチール製の机があり、近くには同じく粗末なパイプ椅子や背もたれのない丸椅子が数脚あるだけでした。周囲を見回すと、構内には仮設の日除けと大小幾つかのテントが見られ、中ほど広場には濁り水が溜まっている小さなプールのようなものもありました。その様子から、カダフィは時おりこの野営地を使っていると思われました。あとで、同行していた大使車の運転手に確かめたところ、そこはサッターダ (Saddada) とされる地域 (地図上ではリビアで3番目に大きい地中海都市ミスラタの南方約 80 km) でした。

石油収入によって財政的に豊かなりビアは、世界の民族解放闘争を支援すると同時に、国内ではサハラ砂漠の地下水を汲み上げて農業や飲料水に利用する巨大な人工河川計画 (Great Man Made River Project) を進め、各地に大規模な会議場施設などを建設しました。しかし、リビアでは、他国に見られるような最高権力者である大統領や国王などが住むための宮殿は建設されず、カダフィ自身はトリポリに居る時でも軍事キャンプ内でテント生活をしていたのは、私も目撃しています。カダフィは、海外訪問の際にも宿泊先の迎賓館やホテルの中庭でテント生活することで知られていました。本来は極めて質素な生活ぶりですが、異文化世界の欧米を訪問した際にも迎賓館や高級ホテルでテント生活に固執することは、ある意味では贅沢の極みかも知れません。

### 《逢沢特使が行方不明に?》

砂漠地帯の野営地でカダフィ指導者に迎えられた私たち逢沢特使一行は、彼と共に木陰に置かれた粗末な椅子に座って会談が始まりました。カダフィ自身は周辺の関係者にも好意的な気遣いをする極めて温厚な人柄と見受けられ、長年にわたり最高権力者として君臨してきたそのカリスマ性の一端が分かったような気がしました。先方の同席者は、私たちを案内してきたシャルガム外相のみでした。日本で言えば、

総理が人里離れた山奥のキャンプ地で折り畳み椅子に座って外国の特使と会談するような感じです。

会談は極めて友好的な雰囲気で行われました。冒頭、逢沢特使から小泉総理の親書を手交し、両国関係の一層の増進を希望すると述べたのに対して、カダフィ指導者からは一行の来訪を歓迎するとして、「日本はいつか訪問したいと思っている国の一つである」との応答があったのを記憶しています。その後、先方から質問に応じて日本の政治・社会情勢についてのやり取りがありましたが、カダフィ指導者が思いのほか我が国の実情を承知しているとの感じを受けました。



写真 2. 逢沢一郎総理特使(外務副大臣)・カダフィ指導者会談

(2004.6.9 水、ミスラタ南方 80 km Saddada の野营地)

(中央は逢沢特使、右端はシャルガム外相、カダフィと握手しているのは筆者)

会談は 2 時間余りに及び、その中で、カダフィ指導者から世界情勢についての持論が展開されたのを今でも印象深く覚えています。彼は、大まかな世界地図を近くに掲げて、今後の世界は米国を中心とする南北アメリカ、中国を中心とする東アジア、インドを中心とする南アジア、EU のヨーロッパ、アフリカにブロック化され、それぞれの間で連携と抗争が起きるようになるとの考えを説明しました。カダフィは、アフリカ諸国が EU や米国と対等な立場で交渉するためにも連帯強化の必要性を訴えて、アメリカ合衆国(USA:United States of America)に倣ってアフリカ合衆国(USA:United States of Africa)の設立を唱えていました。今回の会談で、私はカダフィ自身からその持論を直接聞いて、アフリカ諸国への熱心な働きかけの背景が理解できた気がしました。

上述のとおり、私たちは、ホムスで休憩した後、しばらく走ってから地中海沿いの幹線道路を外れて内陸の砂漠地帯に向かいました。その時点で携帯電話のサービスエリアを離れたために、私たちの現在地をトリポリのホテルで待機している仲間たちに報告することができなくなりました。後で聞いたところでは、逢沢特使とカダフィ指導者との会談が行われていたころにトリポリと東京では逢沢特使が行方不明にな

ったとして騒ぎになっていました。2時間余りのカダフィ指導者とその前後の道中を併せて5時間ほどの間は携帯電話のサービスエリアの外側にいて音信不通となったわけです。国際社会に復帰したばかりのリビアに対する不信感はまだ完全には払拭されておらず、国内の事情もよく分からない時期でしたので、トリポリや東京の関係者はことさらに心配したようでした。

逢沢特使は翌6月10日午前には、シュクリー・ガーネム首相とも会談し、その昼過ぎに帰国の途につきました。2泊3日(実質2日間)の滞在でしたが、充実した訪問でした。この訪問はカダフィ指導者の動静の一環としてリビア国内では大きく報道されました。その後当分の間は、リビア側関係者や外交団の間で日本について話題になることが多くなりました。外交団の一部からは、総理特使とは言え閣僚でもない人物が2日間の滞在でカダフィ指導者と会談できたのは何か特別な理由があるのではないかと探りを入れてくる向きもあったことを記憶しています。

### 《セイフル・イスラムの訪日と幻の小泉・カダフィ会談》

私がリビア在勤中に経験した印象深い出来事のもう一つは、2005年4月に行われたカダフィ次男セイフル・イスラムの訪日に同行したことです。当時、彼はカダフィ政権が諸外国の組織や団体に非公式な財政支援を行うためにNGOとして1998年に設立されたカダフィ国際慈善基金(Gaddafi International Foundation for Charity Associations)の総裁でした。

日本では2005年3月から9月まで愛知万博が開催され、リビアも公式参加国の一つでした。万博会場で行われる参加国の記念行事(ナショナルデー行事)(リビアは4月7日)に参加するため、リビアからも政府代表を博覧会賓客として公式招待することとなりました。リビアにいた私は、当時、政府がないこととなっていた同国ですが、公的機関の代表者であれば招待できると考えて、適当な人物を推薦するよう対外連絡・国際協力担当全国人民委員会(以下、外務省)に申し入れました。ところが、先方から連絡してきたのはNGO組織の総裁であるセイフル・イスラムが訪日に関心を持っているとのことでした。当時の先方外務省は革命指導者の子息である彼については如何なる行動も黙認するとの態度でした。

想定外の展開となった事態を受けた私は、セイフル・イスラムの事務所であるカダフィ国際慈善基金、先方外務省、わが方外務省の間に立って調整した結果、NGOの代表ではあるが、リビアにおける彼の影響力をも勘案して、同国を代表する者として招待することになりました。2005年4月3日から9日までの彼の滞日中の行事には、駐リビア大使として私が同伴することになりました。当時、カダフィの有力な後継候補として国際的にも注目されていたセイフル・イスラムは、4月7日に万博会場EXPOホールで行われたリビア・デー式典に出席したほか、小泉総理、河野衆議院議長はじめ町村外相、谷垣蔵相、麻生総務相、中川経産相、中山文科相(いずれも当時)ら主要閣僚との会談を行い、また、国連大学での講演、リビア現代考古学美術展「砂漠は沈黙ではない」オープニングなど、多くの行事を精力的にこなしました。

セイフル・イスラムの日本滞在中も終わりに近づいたある日、名古屋から東京に向けて彼ら一行と新幹線で移動中に、総理官邸から外務省経由で私の携帯電話に「近くインドネシアのバンドンで行われるアジア・アフリカ会議にはカダフィ指導者も出席する予定と承知している。双方の日程が合えば、小泉総理とカダフィ指導者とが会談することが可能かどうかを先方に打診ありたい」旨のメッセージが届きました。その取扱いについて、私はその場でセイフル・イスラムと非公式に相談すると、彼は直ちに携帯電話で彼の父親(カダフィ)に連絡したようでした。その結果、東京に到着するまでに、セイフル・イスラムから私に「リビア側は日本側の申し出に応じる用意がある。具体的日程は追って協議したい」との返答がありました。

1955年4月にインドネシアのバンドンで開かれたアジア・アフリカ会議は、第2次世界大戦後の民族独立運動に弾みをつけることとなりました。その会議の精神は非同盟諸国会議に引き継がれて、東西冷戦下における第3世界の外交理念として国際社会の存在感を示しました。2005年4月22日～23日に同じインドネシアのバンドンでアジア・アフリカ会議の50周年を記念する首脳会議が開催され、リビアからカダフィ指導者の出席が予定されていました。その会議に出席する小泉総理は、その機会に日・リビア首脳会談を実現できればと考えたようでした。

セイフル・イスラムの訪日が無事に終わって、2005年4月12日にリビアに戻った私は、早々にリビア側と小泉・カダフィ会談の日取りについて協議し、何とか具体的日時をセットするところまでこぎ着けました。ところが、数日後にカダフィのインドネシア訪問が急遽取り止めとなり、小泉・カダフィ会談も実現しないこととなりました。その背景について現地のインドネシア大使など尋ねてみたところ、首脳会議の日程上の都合で彼の演説の機会が得られなくなったことを理由に、カダフィ側が急遽出席を取り止めた由でした。(続く)